杉本小学校　学校運営協議会　議事録
（令和８年度　第１回）

１　日時　　令和８年５月13日（水）

２　場所　　杉本小学校　校長室

３　出席委員　　瀧澤美穂子委員長　河村治委員　藤吉ひとみ委員　鈴木亜矢委員
坂本真一委員、奥泉憲校長、前田潤子教頭、鈴木幹央総括教諭

４　会議の内容

（１）　初めの言葉　教頭

（２）　授業参観

（３）　学校長挨拶

・ＰＴＡの加入率、協力率が高い。

・登校時の挨拶がよい。

・学級減で空き教室ができたので、使用方法も話題にしていきたい。

（４）　学校運営協議会委員委嘱　校長

・瀧澤美穂子委員を委員長として承認

（５）　自己紹介

（６）　実施計画、グランドデザイン、学校経営について　校長

校長：児童一人一人を大切にすることで保護者に学校を信頼していただけると考えている。本日は、インクルーシブ教育についてご協議いただきたい。本校の個別支援体制は資料の通りだが、クラスの友達や担任と関係が良好でもクラスに入れない児童等について、支援の形を考えていかないといけない。委員の皆様は、職場や地域でインクルーシブにどのような印象をもたれていますか？

河村委員：通常級と支援級があり、その場が、喜びになるのかつらさになるのか、様々な人を認め、様々な人を知ることがインクルーシブ教育の目的ととらえた。

坂本委員：インクルーシブというワードを知らない保護者もいる。認知度は低い。我が子が通常級の場合、関心が薄くなりがちのように思う。学校の実情を周知することが大切。フォーカスは困難な方に行くが、ギフテッドのやりづらさもある。

校長：支援級保護者のインクルーシブ意識は高い。外国は通常級、支援級と分離されていない。

藤吉委員：自分の子ども時代は分離されていなかった。その頃は、困難さを抱えた児童の保護者は周囲、家族の目が気になり、母親の責任を一身に背負っていた。時代を経て、交流授業が進み、クラスの友だちの一員としての感覚が児童同

士に芽生えた。母親だけが背負っていたことが、両親や家族の協力体制に変化してきた。

河村委員：フルインクルーシブが進んだら、クラス配置はどうなるのか。レベル別とか・・・？

鈴木委員：公立の小学校でそれは厳しいだろう。

校長：我が子の発達課題を受けとめられる保護者が増えている。また、受けとめられる環境にもなってきている。支援級の児童は支援級でも通常級でも学べるが、その逆はない。保護者は、通常級に籍を置いて、必要に応じて支援級で学ぶというその逆を求めているのではないか。

坂本委員：そのように思う。

校長：支援級に在籍していると、個別の支援により１か月でできるようになったことがたくさん増えているのがわかるので、支援級がなくなるのがよいとは思わないが、分離について世界から日本は指摘されている。

河村委員：集団に溶け込めなかったり、個別の学習指導が必要だったりする児童のために、フルインクルーシブのメリットを周知していくとよい。どう伝えていったものか。

鈴木委員：自主的に児童が多様性を認めるようにしていきたい。先生に強制で多様性を認めるような指導を受けてもしみこまないだろう。学級内での個別指導や全体指導のバランスも気になる。例えば、世話係のような先生が児童に役割を押し付けるようなことは、負担感やネガティブ感につながるのではないか。

校長：学校や教師、大人に一斉に学ぶという教育の従来のベースがあるからそうなってしまうのかもしれない。だとしたら、教員を拡充しても現状と何も変わらないだろう。教室に入り、一斉授業を受けることがゴールだという意識を変えないと変わらない。では、何がゴールなのか？ということについて、こういう協議を通して探っていきたい。

瀧澤委員長：フルインクルーシブを推進するには、何をやるかではなく、まずは、学校が学校便り等で情報発信を続けることでしみこませることではないか。先生たちにも気負ってほしくない。杉本の個別の支援体制は整っていると感じる。保護者にも先生にもインクルーシブを情報発信で分かってもらうことが大切だと感じる。「何か取り組まないといけないのでは」という気持ちを抱かせるまで情報発信していくとよい。

鈴木委員：私には関係ないわとスルーされてしまうこともあるので、事例を紹介していくとよいのでは。

河村委員：世の中、「自分事としてとらえる」ことが話題にあがる。体験しないと響かないこともある。当事者意識がないと、掲示や文章はスルーされてしまうこともあるだろう。関心をもってもらうために、え？となる投げかけがあるとよい。

坂本委員：文字、文章は確かに提示されても読まない。データをわざわざ開く手間もあ

る。妊婦体験のように体験してもらう場として、授業参観懇談会や子育て交流会の先生ブースはどうか。体験してきっかけをつかむと、周知文も心にひっかかるようになるだろう。

鈴木委員：懇談会出席率は高いですか？

鈴木総括教諭：高い。通常級に在籍していても個別指導が必要な児童はいる。それに対応する教師の力量も問われる。多様な児童と一緒に活動するのが当たり前の感覚で授業づくり、クラスづくりができるといいと思う。

校長：弱点はそれぞれにある。弱者にやさしいクラスはいいクラスになる。通常級にも個別の対応や支援が必要な児童がいることが保護者にも伝わっていくといいと感じる。保護者の気持ちに寄り添い、学校も一緒に児童の支援を考えていきたい。それぞれの児童の弱点に困難さを親は感じてはいると思う。

藤吉委員：中学校のように支援級と通常級を教師が行き来して指導する体制もあるとよい。全教員で全児童をみてほしい。

（７）学校行事年間計画について　鈴木総括教諭

（８）学校予算について　教頭

（９）おわりの言葉　教頭